

1日10分で地頭を良くする

2008年8月1日発行(毎月1日発行) 通巻33号
2008年8月13日第三種郵便物認可

日経 Kids+ PLUS

[キッズプラス]

親子の時間に
笑い声をプラス
なるほど!をプラス
安心をプラス

綴じ込み付録

天の川が
きれいな場所ガイド

8

2008_August No. 33

この夏行きたい里山

ゲーム・テレビと
うまく付き合う

伸びしろのある子に育てる

1日10分で 地頭を良くする

東大生は幼少期にどう地頭力を伸ばしたか?
ひらめき力、イメージ力、表現力を養う遊び&学び

定価 600円

地頭がいい子の 5つの条件

1.

自分なりの 疑問を持つ

授業中や生活のさまざまな場面で、「なぜ?」「何?」から始まり、「○○だと、どうしてそうなるの?」「Aはそうだけど、Bだったらどうなるの? Cなら?」と、質問が発展していく子ども。論理的な思考力の土台になる。

2.

発想を自由に 膨らませられる

人形や電車などのおもちゃで遊ぶとき、自分で作った空想の世界で、次々と場面を展開したり、自作のゲームに新しいルールを作ったりと、創意工夫ができる子ども。創造力や表現力のベースができています。

3.

物事を筋道立てて 考えられる

例えば算数の問題で公式を丸暗記するのではなく、どうしてその公式が導き出されるのかということや、証明問題の過程をしっかりと理解できている子ども。論理的に考える力があり、説得力のある発言ができる。

“いい子”は 違う?

4.

相手の意見を聞き、 自分の意見を 上手に伝えられる

相手は自分と違うことを理解して、相手の意見を聞こうとする。相手の話す内容を正しく理解できる。そのうえで、自分が話したいことを頭の中で整理して順序よく話せる子ども。小学校中学年以降にはできるようになりたい。

5.

多方面から 問題をとらえられる

問題の答えや解決方法は1つではなく、「これも答えだ」「こんな解き方もある」などと、多方面から問題をとらえようとする子ども。困難なことに直面してもあきらめず、どうやったら乗り越えられるかを考える習慣ができています。



花まる学習会
代表

高濱正伸さん

93年に学習教室「花まる学習会」を設立。著書は「10歳までが勝負! 「生きる力」をはぐくむ子育て」(SSコミュニケーションズ)、「小3までに育てたい算数脳」(健康ジャーナル社)など多数。



東京都立松修館
中等教育学校校長

石坂康倫さん

2004年から、目黒地区中等教育学校(仮称)開設準備室担当として、「次世代のリーダー育成」を掲げ中高一貫校の設立に携わる。06年に開校し、初代校長に。東京都立大学附属高校校長も兼任。



東京都杉並区立
第七小学校校長

高槻義一さん

子どもの算数に対する意欲と思考力を育てるため、校内に「わくわく算ルーム」を設置。学年別に教科書の内容を超えたオリジナル問題を自ら作成。著書に「算数おもしろ発展学習プリント」(小学館)。

子どもの
地頭を
良くする!



“ひらめく瞬間”が多い子は
地頭がいい!

「地頭力のある子とは、一言で言えば、この子はほとんど伸びるだろうと感じさせる子。です」と、子どもの思考力を重視した学習塾を運営する高濱正伸さんは言う。

例えば、算数の問題を解いているときに「ひらめく瞬間」の多い子や、会話の中に面白い発想がポンポン出てくる子などを指す。「知識ばかりを詰め込まれた感じがなく、頭の中で知識と知識が無意識につながっていて、そこに自分なりの法則性を持っているように見える」と高濱さん。さらに読書から得た情報を自分なりに処理し、言葉に対して自分なりのイメージを持つて表現できる子も、地頭力があるという。

中高一貫校で子どもの論理的思考力を育てる授業を行っている石坂康倫さんは、「小学生の間にいろいろなことに挑戦し、何に対して一生懸命やってきた子は地頭力がある」と感じている。木登りや虫捕りに熱中したり、スポーツに

“地頭がいい どころが

「地頭がいい子」とは、具体的にどのような子どもを指すのだろうか。小学生の間にどんな力を養っておけば地頭が良くなるのか。地頭がいい子の条件を探った。

Column

【地頭を鍛える授業】

「国語論理」「数学論理」の授業で
論理的思考力を育てる

→東京都立桜館中等教育学校

国語、数学の授業以外に、「国語論理」「数学論理」の授業が週に1コマある。国語論理では、問答ゲームや討論会などで自分の意見を正しく伝えることや、新聞記事や言語学者の論文などを読み、人の気持ちを理解し、広い視野を持つことなどを目標にしている。数学論理では、答えを導くための解決法を何通りも考えるような、証明問題の過程を重視する授業を行っている。



パズルやオリジナルプリントで
算数的イメージ力をアップ

→東京都杉並区立第七小学校

教科書には出てこないユニークな問題や算数パズルなどを展示した教室「わくわく算数ルーム」(写真)で、遊びながら算数への関心や意欲を高める。また、問題を正しく読み取り、考える力を伸ばすためのオリジナルのプリントを使った放課後学習「なるほどタイム」を週1回設けるなど、論理的な思考力が問われる算数を「好き」にさせる工夫が凝らされている。



打ち込んだり、たくさん本を読んだりといったことをやってきた子どもは、勉強以外の事柄や他者に対して関心を持つ土壌ができていく。「相手の言っていることを理解、整理して頭に入れるという、論理的思考力のベースができていくということ」(石坂さん)。

で伸ばせる教科として算数を挙げる。問題から情報を正しく読み取り、論理的に思考し、自分の考えを解答という形で表現する必要があるからだ。だが、その前段階として「算数は面白いと感じる心や、挑戦する意欲が何よりも大事」と知的好奇心の重要性を強調する。

3人が挙げる、地頭の良い子に共通している前提条件は、「親ときちんと会話ができていること」。活発な会話で子どもの知的好奇心を刺激している家庭では、子どもが自分の言葉で自分の考えを説明できる素地ができるようだ。

東京都杉並区立第七小学校校長

高槻義一さんは、地頭の良い子

を「考えたことを相手に合わせ

てわかりやすく説明できる子ども

ではないか」と考える。そのため

には思考力とコミュニケーション

力が必要。この2つの力をセット



一戸直子